

2025（令和7）年度

2日〔\*\*〕

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十三ページ、㊦、㊧の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがあれば、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、内容に関する質問は受けつけない。
- 5 解答は必ず黒色鉛筆を使用し、解答用紙に記入すること。
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで完全に消すこと。
- 8 解答に関係のない符号（？レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

一  
次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

自然科学に固有の方法と客観性の根拠を一般的に特徴づけるのは困難であり、現在までの科学史研究や科学に関する哲学的研究の実情からすると、それらの正確で普遍的な定義が仮に求められたとしても、それはまず不可能であろうと率直に認めざるをえない。しかし、かつて近代のドイツ哲学を主導したカントは、諸学問の歴史的な歩みの実像に迫ることで、自然科学が採用している方法の根本的な特徴と客観性の成立に秘められた真相の一端<sup>A</sup>を、かなり意外性のある内容だといえ、現在の観点からしても的確かつ厳密に浮かび上がらせていた。そこで、かれが洞察した諸学問と自然科学の根本的な特徴を確認しておくことにしたい。

カントは『純粹理性批判』第二版（一七八七年）の序文で次のように述べている。「理性の営みに属している認識の取り扱いが、学問としての確実な途を歩んでいるのか否か、そのことは成果からただちに判定される」。そして、諸学問のなかでも論理学は、アリストテレス（アリストテレース）以来、認識される一切の対象とその差異を I して、われわれの思考能力である悟性（知性）そのものを主題化し、考えられる対象が何であろうと、いつでも従うべき思考すべての形式的な諸規則を詳細に説明するとともに、それら諸規則を厳密に証明するカ<sup>A</sup>ダイに着手したことによって、すなわち「悟性の形式」だけを問題にしたことにより、学問としての「確実な途」について考えた。たとえば、われわれが景色の美しさについて考える場合と日用品の使い易さについて考える場合とは、互いにかなり質の異なった思考の働き方にならざるをえない。しかし、どちらの場合も、また如何なる場合であっても、矛盾律が教えるとおり、一つのことを同時に肯定しつつ否定する考え方はできない。この矛盾律のように、対象の違いに左右されることなく成り立つ、言い換えれば、対象とその差異を I して常に成り立つ思考の形式的な諸規則が扱われることで、論理学はあらゆる場合に妥当する II をその成果として獲得し、今日まで揺るぎない学問の地位を固めたのである。かつて論理学が達成したのは、考えられる対象すべてを主題から除外して、悟性そのものを主題化しなければ、けっしてもたらされえなかった成果にほかならない。しかも、悟性は III の理性

能力に含まれるその一範囲であるから、論理学は実のところ、理性が理性自身を主題化して吟味検討する、いわば「理性の自己確認」によって、学問としての確実な途を歩み始めたのである。

数学にも論理学と類似した一面がある。たとえば、紙面上に描かれた一つひとつの二等辺三角形を相手に、分度器で両底角がそれぞれ何度であるか調べていくのでは、ただか両底角がほぼ等しいこと、そしてどのような形状で、どのような大きさの二等「辺」三角形でも、両底「角」は等しい「ようだ」という認識しか得られない。というのも、どれほど精確な分度器であろうとも測定精度には限界があり、また両底角の等しくない二等辺三角形に、いつしか遭遇してしまう可能性を、あらかじめ完全に除去する手立てはないからである。他方、ユークリッド的な二等辺三角形の概念（定義）に沿って、純粹な二等辺三角形を頭のなか、あるいは紙面上に構成（描出）し、構成された直観だけを頼りに両底角の等しさが証明されるならば、如何なる二等辺三角形でも必ず成り立つ点で、すなわち普遍的かつ必然的に成り立つという意味で、二等辺三角形についての客観的な認識が得られる。われわれは対象である図形から、何かを単に受容するというのではなく、自分のもつ概念に従って対象（図形）を構成し、その構成をつうじて対象のなかに自らが置き入れているコトガラ<sup>1</sup>のみから、しかも必然的に導かれることだけをあらためて認識するのである。このように、単なる受容から構成による認識へ方向転換をつうじて、数学は学問として確実な途を歩むことになった。

カントによると、数学は「ギリシア人という驚嘆すべき民族」のなかで、二等辺三角形の証明が行われて以来、学問として着実な途を歩んでいる。その証明に秘められた画期性の核心とは、図形の単なる概念から図形の性質を受容して学ぶのではなく、概念に沿って自分自身が<sup>B</sup>ア・プリアリに——すなわち、われわれが与かる理性に備わった諸原理の側から——図形のなかに「考え入れ *hineindenken*」している特徴を、また自らが「構成 *Konstruktion*」する図形の特徴を、概念に対応する直観の<sup>A</sup>ア・プリアリな「産出 *hervorbringen*」により、普遍的かつ必然的に成り立つ特徴として確認するところにほかならない。それゆえ、数学もまた論理学と同様、認識される対象すべてを<sup>ウ</sup>イッタンは研究の主題から除外し、純粹な直観の働きと純粹な思考（悟性）の働きで、図形の単なる概念（定義）から、あらゆる対象——定義どおりの全図形——について必ず成り立つ客観

的な認識を達成した成果により、学問としての地位を確立したのである。

実際に、たとえば数学のなかでも幾何学では、直観の普遍的な形式（空間・時間）と思考の形式的な諸規則に従って、証明問題の突破口を切り開く確な補助線が引かれたとき、あるいは解析学で微分方程式の適切な変形に成功したとき、紙面上に知覚されている図形や式の表象（経験的直観）と二重写しに、ア・プリオリに構成された純粋な直観（形式的直観）がもたらされるため、経験的な要素に影響されない普遍性と必然性、すなわち客観性をもつ定理や解法の認識が達成されている。つまり、われわれはそうようにして、自らの純粋な直観と純粋な思考がア・プリオリに構成した所産を、紙面上の図形や式のうちにあらためて確認しているのである。そして、思考（悟性）と同様、直観も広義の理性能力に含まれるその一範囲であるから、理性が理性自身を主題化して吟味検討する「理性の自己確認」により、数学も学問としての確実な途を歩み始めていた。

自然科学についても、たとえば物体の落下現象（自由落下）がどれほど多く観察されたところで、あらゆる重量の重い物体が必ず等加速度で落下するといった、普遍性と必然性をもつ客観的な認識はけっして得られない。これは二等辺三角形の両底角と同じ事情である。自然科学者たちはまず最初に、自然のなかで成り立っていると思われる法則を、理性によってあらかじめ自発的に案出しなければならず、仮説として案出されたその法則どおりに、自然が実際に振る舞うか否かを、理性に従って構想された実験で確かめなければならないのである。

かつて、ガリレオは教会の聖堂に入ったとき、天井から吊り下げられた照明器具が静かに揺れている様子を見た。すると、落下とはまったく異なるその揺れに触発され、かれは物体の落下に関する仮説に思い至ったとも伝えられている。物体は落下後に経過した時間の長さ按比例する速さで運動しているのではないだろうか。このように、観察からは得られない仮説の着想から出発して、もしも仮説が正しいとすれば、単位時間ごとの落下距離が奇数列（ $1 \cdots 3 \cdots 5 \cdots 7 \cdots$ ）の比率で次第に増大することを、かれは数学の手法で厳密に導き出した。その後、導かれたこの結論どおりになることを確かめる目的で、ガリレオは有効な実験方法の確立にむけて創意工夫を重ねたのである。ここまで、かれは自然を調べていないどころか、観察さえまったく行っていない。そして、かれは思案の末、精巧に加工された金属球を摩擦の少ない緩やかな斜面の上に置いて運動さ

せ、仮説の有効性を見事に検証したのである。したがって、かれは

X

ところで、ガリレオが行ったこの実験的方法でさらに注目したいのは、数学の手法で導き出された上記の結論が、物体の落下と照合されたのではない点である。結論と照合されたのは、あくまでも金属球の「転がり方」であり、金属球の「落下」ではなかった。金属球の転がり方は実のところ、自由落下の「理論モデル」であり、分かりやすくするために、敢えて今日風に表現すると、その転がり方は「人工的にスローモーション化された自由落下」だったのである。この点で、観察される自由落下そのものは、解明すべき自然現象でありながら、意外にも最後まで調べられていなかった。しかも、照合した結果、ガリレオが認識したのは仮説どおりになるという「こと」であり、金属球に固有の何かが認識されたのでもなければ、何らかの「もの」が認識されたのでもない。かれが獲得した客観的な認識は、如何なる「もの」の認識でもなく、仮説が有効であるという「こと」の認識であつたと理解してよいだろう。言葉で表現すると奇妙に響くが、そもそも実験に用いられた金属球は、重さがあるものであれば、他の何であつてもよい単なる一例でしかないからこそ、あらゆる物体で仮説どおりになるという「こと」が検証（確証）されたのである。

こうして、ガリレオの実験的方法がその典型であるように、自然科学は自然から単に受容する仕方では認識する旧来の方法から、理性が独自に考案して「自然のなかに置き入れる in die Natur hineinlegen」仮説の有効性を、創意工夫された実験装置で検証する方法へと方向転換したことにより、学問の大道を歩み始めたのである。「理性は自らの計画に従って自ら産出するものしか識別しない」。このため、ひとたび検証（確証）された仮説は、経験的な要素に影響されない普遍性と必然性をもつ。したがって、仮説を覆すようなことが、いつしか経験されるのではないかと、もはや煩わされる理由もなくなっている。自然科学はこうした方向転換により、客観的に成り立つ法則どおりの認識を着実に達成し、偶然の発見に頼ることなく認識を拡張できるようになった。これが自然科学の決定的な成果にほかならない。そして、実情からすると、実験で行われているのは自然の仕組みや成り立ちを調べるものではなかった。実験とはすなわち、理性の所産である仮説の有効性を調べる手続きにほかならず、われわれは実験をつうじて、理性に従った仮説の着想、仮説からの（演繹的）推理、精密な検証を可能にする具

体的な実験方法の構想など、総じて理性自身の営みがどれほど有効であるのか、まさにその有効性を確認していたのである。このように、自然科学もまた論理学や数学と同様、理性が理性自身を主題化して吟味検討する「理性の自己確認」により、学問としての確実な途を歩み始めたといつてよい。

諸学問の歴史的な歩みの真相からすると、確かな成果をもたらした学問はいずれも、直接的ないし間接的に理性自身を探究して自己確認している。また、数学と自然科学はこの点に加え、対象に対して受容的な認識を行うのではなく、われわれによる対象の自発的な構成を介した認識に携わっていたのである。「われわれはこれまで、われわれの認識がすべて対象に従って規定されなければならないと考えていた」。ところが、仮にそのとおりであれば、そもそも「対象に関して何かを概念によってア・プリオリに規定しつつ、しかも認識を拡張しようとする試み」は失敗に終わるほかない。それゆえ、現に数学と自然科学がそのような不可能とも思える試みに成功している以上、対象の側がわれわれの認識に従って規定されなければならないと想定する態度は、確実な途を歩んでいる学問がもたらした成果の揺るぎない基盤であると評価してよいだろう。カントは以上のように諸学問の歴史を振り返り、特に数学と自然科学については、いずれも「理性の自己確認」として成り立つ認識であり、しかも対象を概念によってア・プリオリに規定する拡張的な認識であると、両者の特徴を極めて厳密に洗い出していたのである。

（瀬戸一夫『なぜ科学はキリスト教圏で成立したのか』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

問一 傍線部（ア）（ウ）のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（ア）カダイ

- 1 カセイは虎よりも猛し
- 2 カチヨウキンを支払う
- 3 カキユウの用件が生じる
- 4 コウカ下の土地を活用する
- 5 一人に過大なフカがかかる

（イ）コトガラ

- 1 電池をヘイレツにつなぐ
- 2 戦国武将がキヨヘイする
- 3 オウヘイな態度を改める
- 4 ゴヘイのある言い方をする
- 5 あまりの騒音にヘイコウする

（ウ）イッタン

- 1 タンスイ魚を研究する
- 2 タンネンに仕上げをする
- 3 相手のコンタンを見抜く
- 4 大きな会社がハタンする
- 5 一年の計はガンタンにあり

問二 第一段落四行目二重傍線部の漢字を含む単語が文中で示す意味と最も近い意味となるようにその漢字を置き換えるとすれば、以下の選択肢の中で最も適当なものはどれか、その番号を答えなさい。

一端 1 説

2 寸

3 方

4 部

5 切

問三 空欄

I

Ⅲ

を答えなさい。なお、二つある I に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号には同じ語が入る。

I

1 過大視

2 疑問視

3 絶対視

4 度外視

5 白眼視

II

1 一般性

2 適応性

3 同調性

4 特有性

5 発展性

III

1 衍義

2 広義

3 原義

4 旨義

5 精義

問四 傍線部 A かれが洞察した諸学問 とあるが、その説明として適当ではないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 論理学は、理性自身を検討の対象とする場合にも成り立つような理性の働きによって基礎づけられた学問といえる
- 2 議論する対象の違いに関係なく、あらゆる場合に同じ結論を導き出せることが論理学の地位を揺るぎないものにした
- 3 幾何学とは現実中存在する図形をつぶさに観察するのではなく、概念としての図形を考察しようとするものである
- 4 論理学の考え方の一つに、対象 A が「A である」と同時に「A ではない」ということはありえないというものがある
- 5 数学と論理学はその検証方法が似ているのと同様、普遍性・必然性を志向しているという点でも相似した学問である

問五 傍線部B ア・プリアリとあるが、次の  はこの語の意味を辞書で調べて整理したノートである。空欄

IV } VI に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

もとは「先なるものから」という意味のラテン語。スコラ哲学では定義や原理から認識や議論を始めること。  
カント以後の用法では、IV 推理に代表される V に依存しない性質のこと。また、生物学・心理学などでは、VI なもののことを指す。

- |                                                                                   |                                                                             |                                                                                   |
|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| <p><b>IV</b></p> <p>1 原理的</p> <p>2 客観的</p> <p>3 具体的</p> <p>4 受容的</p> <p>5 演繹的</p> | <p><b>V</b></p> <p>1 仮説</p> <p>2 思考</p> <p>3 検証</p> <p>4 経験</p> <p>5 期待</p> | <p><b>VI</b></p> <p>1 生得的</p> <p>2 実用的</p> <p>3 社会的</p> <p>4 全般的</p> <p>5 理論的</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|

問六 傍線部C「二等辺三角形の両底角と同じ事情」とあるが、どのような「事情」か。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 反証事例を見つけ出し、弁証法的な推論をしないと正しい認識に至れないという事情
- 2 帰納的な検証を何度繰り返してみても、例外の存在を完全には否定できないという事情
- 3 理論化の対象となる図形や現象を定めるには、特定の条件設定が必要になるという事情
- 4 現実の図形や現象についての考察にあたり、逆説的に概念を用いる必要が生じるという事情
- 5 眼前の「もの」への微視的な観察と、概念を操作する思考が同時に求められるという事情

問七 空欄

X

に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 着想に由来する仮説と、理性による推理の有効性を確認したといつてよい
- 2 有効性の確認にあたり、ア・プリオリな直観を徐々に排除していったといえる
- 3 観察なしで有効性を検証したという後世の評価を、苦々しく思っているだろう
- 4 自分の検証精度の向上のため、より摩擦の少ない斜面を創出する必要が出てきた
- 5 物体の落下現象を観察せず、それに近似した状況を作り出しただけでもいえる

問八 傍線部D 精密な検証を可能にする具体的な実験方法の構想とあるが、本文で述べられた「実験」についての説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ガリレオが物体の落下現象についての仮説を検証するために、転がす金属球の素材を特に吟味したように、実験の材料の選択こそが最も重要である
- 2 悟性（知性）そのものを主題化する方法論を取る現代の科学において、実験という対象を観察する仮説検証法は採用しないで済むならないほうがよい
- 3 実験は、金属球のような物質を使った仮説の実証方法であるが、その本質は仮説という理性の産物が普遍的かつ必然的であるかを検証する営為である
- 4 自然現象そのものを再現するような実験は、必要がないことが自明な場合にのみ、モデル実験を通して自身の仮説は十分に検証されうるという認識に至ることができる
- 5 多くの研究者が有効な実験方法を創意工夫し仮説を裏付ける結果が出るまでその実践を繰り返すことを積み重ねた結果、自然科学は客観性の学問となった

問九 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 自然科学は一貫して客観性を有する学問だったが、哲学者カントによる洞察はそれを強く保証するものであった
- 2 二等辺三角形の測定を数多く繰り返しても、正三角形その他の図形については何の検証もされない点で限界がある
- 3 検証する対象がどのようなものかに関係なく成立する認識を扱っている点で、数学と論理学は共通している
- 4 照明器具から物体の落下についての仮説を着想した時点で、ガリレオは自然から単に受容して認識する段階にいた
- 5 あらゆる状況を設定することは実際上不可能であるので、実験は仮説の補助的な検証方法ではない
- 6 考察対象が我々人間の理性の働きによって規定されるという考えは、科学に前進をもたらす発想の転換であった

## 二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

素晴らしく簡潔な書『いかにして言葉でものごとを行うか』を著した英国の言語哲学者オースティンによれば、発話もまた行為である。言語の主たる機能は、事実を記述することにとどまるものではない。言明を発することによって、私たちはある種の行為をスィ<sup>エ</sup>コウしている。厳密には三種類の行為を私たちは発話によってなしうるとオースティンは言う。第一に、文言を発する、とにかく何かを言う、という行為（発語行為）がある。第二に、約束をする、ア<sup>イ</sup>ヤマる、質問するなど、当の発話においてなにごとかを行うという行為（発語内行為）がある。第三に、その発話によって他者に何らかの影響を与えるという行為（発語媒介行為）があり、これには他者を説得する、確信させる、感動させる、脅す、印象づける、といった類の発話が含まれる。では、「あの人は太っている」「背が低い」「不細工である」といった発言は、そのどれに当たるのだろうか。単なる記述にすぎないのか、話者がそれによってなにごとかを行なっているということなのか、それとも聞き手に何らかの影響を与えようとしているのだろうか。おそらく、これらの容姿発言は、文脈にもよるが少なくとも場合において、誰かの身体的特徴を単に記述しているのみならず、そうした容姿に対する話者の態度を表し、また聞き手に何がしかの影響を与えうるような行為である。

<sup>A</sup> このオースティンの路線を引き継いでさらに示唆に富む言語分析を提示したのがヘアである。彼の分析は一見すると実にシンプルで明快である。ヘアはまず、私たちが用いる言葉は大きく記述語と評価語の二つの種類に分けることができると指摘する。記述語とは、机、コップ、黄色、紫、走っている、泳いでいる、星が光っている等々、そのものが何であるか、あるいはどのようなものであるかを記述することを主たる機能とする一群の語を指す。その語の意味が何かと問われたら、話者はその語に対応する物体や現象や場面を「これです」と指し示すことによって説明することができる。指し示されたものを知覚できる者なら誰でも同じようにその意味を把握できるという点で、記述語の意味は「客観的」だと言うことができる。これに対して評価語は、「～せよ」といった各種の命令表現や、「よい」「悪い」「べき」「正しい」「美しい」「醜い」「素晴らしい」「酷い」

などの言葉を指す。《 a 》ヘアによれば、それら評価語の主要な機能は、何かを勧めること、あるいは指図・指令することである。「よい」「美しい」「素晴らしい」といった語を含む言明が発せられる場合、話者はその良いとか美しいとか素晴らしいとされるものを（通常の大抵の文脈においては）自他に対して勧めており、自分がもし選べるならばそういうものを選ぶようにという形でそのものを選ぶよう自分自身に指図・指令し、あなたもその機会があればそれを選ぶようにと聞き手に指図・指令している。「悪い」「醜い」「酷い」といった言明においては、話者はそのものを（通常の大抵の文脈においては）自他に対して選ばないよう勧め、指図・指令するという I がある。ここで覚えておくべきことが二つある。第一に、その勧めないし指図・指令がどこから出てきているのかといえば、それはその評価語を含む言明を、発した人から来ているのであり、その発話者の嗜好ないし価値判断を反映しているだろうということである。第二に、その勧め・指図・指令とは、話者の感情や態度を単に記述・表出しているのでもなければ、聞き手に決まった影響を与えるとも限らない、もっと理解に注意を要するようなものだということである（この点で、ヘアの分析はオースティンの三分類とは異なる）。ヘア曰く、聞き手に向けられた指令に聞き手が本当に従おうと決心するとは限らない。そう決心するとすれば、それは聞き手が話者の評価的言明（とそこに含まれる指令）に真面目に同意したような場合である。「あれはよい（美しい、素晴らしい）ね」という言明に聞き手であるあなたが本気で同意する場合には、あなたはその言明に含まれる指令を自らのものとして肯定しており、（適切な機会にそれを選ぶことができる限りは）そのものを私も選ぶよう、自分自身に勧めることになる。そして「あれは悪い（醜い、酷い）」という言明にあなたが本気で同意する時には、（適切な機会にそれを選ぶか選ばないかを自分で決められる限りは）私もそれを選ばない、という指令に自ら II することになる。

ヘアによる記述語と評価語の区別は、一見するとわざわざ説明してもらってもない当たり前の区別であるようにも見える（私たちは、事実と意見の区別を小学校の頃すでに習ったのではなかったろうか）。《 b 》私たちは時に、どの語・発話が記述的で、どの語・発話が実際には評価的なものであるのかを誤ってとらえていることがあり、それが議論や理解の混乱やすれ違いをしばしば引き起こすことになる。

ヘアの分析をもう少し進めよう。彼によれば、私たちは通常大まかな仕方では評価語を記述語から区別することができるが、時に、普段は評価語とされているものが記述の意味を持つこともあり、普段は記述語とされているものが一定の評価的ないし指令的意味を持つこともある。例えば、「よい」「べき」と言うのは基本的には評価語であり、何らかのものを勧めたり指図したりすることを第一義的な機能とするが、これらの言葉が一定の記述的事実を伝えることも

### Ⅲ

してある。

ヘア自身の挙げる「よい<sup>B</sup>苺」の例を借りるなら、仮に私が「角のセイカ店<sup>C</sup>にとてもいい苺が出ているよ」と告げた場合、聞き手の心にはおそらく艶やかで色鮮やかに熟した苺が思い描かれるはずである。私が「よい」苺だと言うことによって、聞き手は単なる苺という以上の多くの記述的イメージを受け取ったことになる。しかしまた、私が「あれはよい苺だ」と言うときに、私はそうした苺の形状を単に記述してではなく、そういう苺を聞き手にお勧めしている。自分で食べるなら私ならそういう苺を選ぶし、あなたもそういう苺を選んだ方がいいよと勧めているのである。《C》また、一部の用語や言明のなかには、基本的に記述的だが、評価的な意味も併せ持つものがあるともヘアは言う。例えば彼が「二次的に評価的な語」とみなす「勤勉な」「几帳面な」といった言葉は、ある人の様子についての記述的なイメージを聞き手に与えるものでありながら、同時にそのような特徴を聞き手に勧め、機会があればそのような特徴をあなたも身につけるようにと指図・指令する機能をもっている。

さらに重要なこととして、表面上は記述語にしか見えないのに、実はかなり強烈な評価的意味を隠し持つ語も存在する、とヘアは指摘する。ヘアによれば「殺人」という語はその一例である。そして、私たちの目下の関心事である容姿にまつわる表現でいえば、「太っている」「背が低い」「不細工」「頭髮が薄い」といった類の一連の語もおそらく、記述的に見えてその実は強烈に評価的な意味を持つ語であるということに私たちは気づかなければならない。当の「一見しての記述語」にどのような肯定的・否定的評価・指令が伴うかは、その語が使われる社会の歴史的文化的な背景や、その語が用いられる当時のフウチョウ<sup>E</sup>によって違ってくるだろう。ふくよかな体型が伝統的によしとされてきたコミュニティでは、「太っている」は美しいもの、選べる機会があれば選んだ方がよいものという肯定的な評価的意味と指令とを伴うだろう。その一方で、同じ体型が否定的な

ものとして描かれ続けてきた社会においては、同じ「太っている」という言葉であっても、体つきがふくよかであるという同じ記述の意味を伝えるものでありながら（この点は重要である）、それに伴う評価の意味や指令は全く違う否定的なものとなる。《d》

記述語と評価語、そして一見記述語にみえて隠れた強烈な評価の意味・指令をもつ語、といった基本的な道具立てが揃ったところで、或る人についての容姿発言がなぜ、どのようにしてその人を害するのか、という問いに立ち返って分析してみよう。現代のわたしたちの社会において、ある特定の容姿表現は、様々な歴史的・文化的経緯を経てきた中で、一見すると記述語にみえながら強烈な評価の意味を伴っている。太っている、背が低い、髪が薄い、等々の発言は、例外もあるが現代日本における通常の多くの場合、その人の外見をあたかも単に記述しているようでありながら、私ならそういう外見は選ばないし、あなたも選ばないでしょう、という評価の意味と指令性をもつものとして発せられる。その発言を受ける側は、話題となっている人が確かにふくよかな体型をしている、身長が平均を大きく下回る、頭髮量が少ないといった場合には、その記述的事実は合っているために確かにその通りですねと半ば相槌を打ちそうになる。しかしその発言に同意することは、その記述的事実を認めることにとどまらず、ええ私もそういう外見は選びませんね、という発話者の指令も自らのものとして受け入れることになってしまうのである。話題にされた当人は、いかに自分がそうした周囲の価値観の強制・指図から解放されて思うままに生きたいと願っていたとしても、発話者とそれに頷く人々との「あなたのような外見は選ばないし、お勧めしない」という否定的な評価と指令とを、一気に投げつけられることになる。あらゆる人間に共通する根本的な本性としてトマス・ホップズが指摘したように、私たち全ての人間が、生きて様々な活動を思うままにできるようでありたいという一般的な欲求と、自分のことを他人から（自分の思う以上に）低く評価されたくないという自尊心とをそれぞれ持っているならば、周囲からのそうした否定的評価・指令は言われた者の自尊心を傷つけ、思うままに生きる欲求を妨害するという意味で、その人を直接に傷つけるものであるだろう。《e》或る人の容姿についての発言は、その中で用いられる用語・表現が私たちの社会の中で記述的のみならず否定的な評価の意味・指令を含み、かつ私たちがそのことを知っている場合、言われた当人を直接に傷つけるもので

あり、そのことにおいて道徳的に不適切なものである。或る容姿発言が道徳的に不適切なものであるかを見極めたいと思うなら、その発言に含まれる用語の評価の意味と指令性に私たちは敏感である必要がある。

では、或る人の容姿を何らかの動物、例えば豚に例えるような発言についてはどうだろうか。おそらく、人間をいかなる動物に例えてもその発言が道徳的に不適切となるわけではないだろう。或る人の容姿を白鳥や孔雀に擬えた場合、言われた当人を傷つけ憤らせることはあまりないだろう。容姿を豚のような動物に擬えることが人を傷つけるのは、私たちの生きているこの時代のこの社会において豚が否定的な評価の意味を持つものとして描かれてきたという背景を、私たちが理解しているからに他ならない。もちろん例外はある——児童文学『シャーロットの贈り物』や映画『紅の豚』で描かれる主人公の豚にあっては、否定的な評価の意味は

**IV**

。しかし、ソクラテスによって太った豚になるくらいなら痩せた哲学者である方がましだと言われ、イスラム圏で豚が不浄の生き物とされ、現代日本でも罵り言葉や侮蔑表現に繰り返し豚が登場してきたことを私たちは知っている。そのような時代的文化的背景にあつて、或る人を単にふくよかな体型であることのみをもって肉付きの良いイメージを持つとされる豚に擬えることは、そうした否定的評価をこの発言においては覆す意図が私にはあるのですといった説明が発言の受け手に丁寧になされない限り、豚というイメージがこれまで抱えてきた否定的評価・指図を否応もなく一緒くたに当人に投げつけるものとして、その人を傷つけ、不快にさせるのも無理のないことである。

（奥野満里子「差別と侮辱」による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

問一 傍線部（ア）（エ）のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（ア） スイコウ

- 1 国家のセイスイを論じる
- 2 復興工事をカンスイする
- 3 スイソウガク部に入部する
- 4 先輩の技術にシンスイする
- 5 指導者が率先スイハンする

（イ） アヤマる

- 1 器具をシャフツ消毒する
- 2 シャコウシンをあおる広告
- 3 ヨウシヤない叱責を受ける
- 4 外部の雑音をシャダンする
- 5 面会シャゼツの状態になる

（ウ） セイカ

- 1 セイレンな印象の政治家
- 2 一身にセイボウを集める
- 3 人間到る処セイザンあり
- 4 祝賀会がセイキヨウに終わる
- 5 お客に対しセイイを尽くす

(エ) フウチヨウ

- 1 マンチヨウ時の水位を測る
- 2 回復のチヨウコウが伺える
- 3 番組のシチヨウ率を調べる
- 4 利害をチヨウエツした行動
- 5 屋上からの美しいチヨウボウ

問二 空欄

I

IV

その番号を答えなさい。  
に入る語句・表現として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、

I

1 下意

2 客意

3 含意

4 執意

5 疎意

II

1 加担

2 担保

3 補佐

4 臨場

5 累加

III

1 肅々と

2 懇々と

3 黙々と

4 千々に

5 往々に

IV

1 薄々承知される

2 些かも示唆されない

3 みすみす看過される

4 ゆめゆめ忘れない

5 一概に無視できない

問三 本文中の空欄《 a 》《 e 》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

しかし、ものごとはそれほど単純ではない。

- 1 《 a 》      2 《 b 》      3 《 c 》      4 《 d 》      5 《 e 》

問四 傍線部 A オースティンの路線を引き継いでさらに示唆に富む言語分析を提示したのがヘアであるとあるが、筆者はオースティンとヘアの分析の相違点をどのように見ているか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 オースティンが「発語行為」と「発語内行為」の二つに分けた行為を、ヘアは記述語という一つのカテゴリーに集約した点
- 2 オースティンの「発語行為」には発話者の主観が残っているのに対し、ヘアの記述語は純粋に客観的なものとして一貫している点
- 3 オースティンが他者に影響を与えようとする発話者の意図に着目しているのに対し、ヘアは聞き手の意図も考慮していた点
- 4 オースティンは発話でなにごとかを行う「発語内行為」が可能であるとしたが、ヘアは発話にそのような機能は認めなかった点
- 5 オースティンが発話全般を対象に分析していたのに対し、ヘアは発話者の差別的意図がどのように受容されるかを問題にしていた点

問五 傍線部B「よい苺」の例を借りるなら とあるが、「苺」の例はどのようなことを言うために用いられているか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 言葉は時に記述語にも評価語にもなりえ、一意に分類できるものではないということ
- 2 記述語と分類されるものの中にも、評価語としての性質をもつものがあるということ
- 3 単に事物を記述したようであっても、言語は評価語的な性質をぬぐえないということ
- 4 記述語は確定できても、評価語的な性質だけを持った語というのは存在しないということ
- 5 評価語は原理的に、発話者と聞き手との間に意思の疎通も齟齬も生んでしまうということ

問六 傍線部C 或る人についての容姿発言がなぜ、どのようにしてその人を害するのか、という問いとあるが、この「問い」について筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 或る人についての容姿発言が否定的な評価を含む際に道徳的に不適切であることは当然として、肯定的であっても、或る人の自尊心を毀損することはある
- 2 表面上は記述語なのに、強烈な評価的意味を隠し持つ語の存在とその指令性に敏感になることで、或る人を害することなく容姿についての発言が可能になる
- 3 或る人についての容姿発言が不適切であると広く承知されていても、否定的評価を繰り返されていた動物に擬える表現を含むと、受容される場合がある
- 4 或る人についての容姿発言が時代的文化的に否定的な意味や指令を含み、そのことが広く人々に認知されているならば、その表現は望ましいものとは言えない
- 5 記述語のつもりで発言してもそこに含まれる評価を読み取られることがあるように、或る人についての容姿発言がその人を害するかどうかは、話者の態度による

問七 以下は、この文章を読んだ高校生の発言であるが、これら六つの発言のうち本文の内容と合致しないものを、次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「雨が降ってきた」という記述的な発言が、洗濯物を取り込むことを他人に指図する意味を持つことがあるように、記述語と評価語は厳密には区別できないですね
- 2 筆者は様々な例外を視野に入れて慎重に議論を進めつつも、評価的意味と指令性を含む語の使用が不適切なものになる可能性を言語学的に解き明かしています
- 3 たしかに私たちは「事実と意見の区別」を学習しましたが、事実を述べたつもりでもそこに意見や評価、さらには命令までも汲み取られる場合があります
- 4 筆者が言うように、日本語の「長い」と英語の「long」では、同じ意味でも記述の仕方が違ってくるのだから、それに伴い評価の意味も微妙に異なってきますよね
- 5 動物に対するイメージは人それぞれなので、他人の容姿について発言する際に自分が肯定的に捉えてさえいれば、動物を用いる表現を用いてもよいということですね
- 6 事物に対するイメージは時間をかけて醸成されていくものなので、否定的イメージをもつ語を肯定的な意味に用いる場合には、きちんとした説明が必要です

国語解答用紙 2日「\*」

一

|    |     |                            |
|----|-----|----------------------------|
| 問一 | (ア) | ①<br>●<br>③<br>④<br>⑤      |
|    | (イ) | ①<br>②<br>●<br>④<br>⑤      |
|    | (ウ) | ①<br>②<br>③<br>④<br>●<br>⑤ |
| 問一 |     | ①<br>②<br>③<br>④<br>●<br>⑤ |

|    |     |                       |
|----|-----|-----------------------|
| 問三 | I   | ①<br>②<br>③<br>●<br>⑤ |
|    | II  | ●<br>②<br>③<br>④<br>⑤ |
|    | III | ①<br>●<br>③<br>④<br>⑤ |

|    |    |                       |
|----|----|-----------------------|
| 問四 |    | ①<br>●<br>③<br>④<br>⑤ |
| 問五 | IV | ①<br>②<br>③<br>④<br>● |
|    | V  | ①<br>②<br>③<br>●<br>⑤ |
|    | VI | ●<br>②<br>③<br>④<br>⑤ |

|    |  |                       |
|----|--|-----------------------|
| 問六 |  | ①<br>●<br>③<br>④<br>⑤ |
| 問七 |  | ●<br>②<br>③<br>④<br>⑤ |

|    |  |                            |
|----|--|----------------------------|
| 問八 |  | ①<br>②<br>●<br>④<br>⑤      |
| 問九 |  | ①<br>②<br>●<br>④<br>⑤<br>● |

二

|    |     |                       |
|----|-----|-----------------------|
| 問一 | (ア) | ①<br>●<br>③<br>④<br>⑤ |
|    | (イ) | ①<br>②<br>③<br>④<br>● |
|    | (ウ) | ①<br>②<br>●<br>④<br>⑤ |
|    | (エ) | ●<br>②<br>③<br>④<br>⑤ |

|    |     |                       |
|----|-----|-----------------------|
| 問二 | I   | ①<br>②<br>●<br>④<br>⑤ |
|    | II  | ●<br>②<br>③<br>④<br>⑤ |
|    | III | ①<br>②<br>③<br>④<br>● |
|    | IV  | ①<br>●<br>③<br>④<br>⑤ |

|    |  |                       |
|----|--|-----------------------|
| 問三 |  | ①<br>●<br>③<br>④<br>⑤ |
| 問四 |  | ①<br>②<br>●<br>④<br>⑤ |
| 問五 |  | ●<br>②<br>③<br>④<br>⑤ |

|    |  |                            |
|----|--|----------------------------|
| 問六 |  | ①<br>②<br>③<br>●<br>⑤      |
| 問七 |  | ①<br>②<br>③<br>●<br>④<br>⑥ |

48点

52点